
Angel Beats! -Extra-

カロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! —Extra—

【Nコード】

N5489V

【作者名】

カロン

【あらすじ】

各話ごとに違ったキャラクターが主人公。Angel Beatsのオマケのようなものです。

episode 00 DEVIL PLAYER (前書き)

はじめまして、カロンです。

初めての作品なので、色々と不手際があるかもしれませんが、どうぞよろしくおねがいします。

落ち着いたら後書きに何かやりたいと思っているので、何か案のある人は、お聞かせください。

一応NG集を予定しています (汗)

episode 00 DEVIL PLAYER

アナログ時計の長針と短針が重なった。

深夜0時。

先ほどからそれを見ていた雨宮六斗は、視線を時計から目の前のパソコンに移した。

本来ならもう寝ている時間なのだが、今日はそういう訳にはいかない。

なぜなら、目の前のパソコン——いや、この悪魔をこの世から消しさらねばならないからだ。

パソコンの画面には『DEVIL PLAYER』と書かれた文字が画面上を好き勝手に動き回っている。

六斗は、それをじっと眺めた。

何一つとして変化はない。文字が画面上を移動しているだけだ。

——今しかない。

六斗はそう考え、パソコンのすぐ側にある機材から『DEVIL PLAYER』のディスクを取り出そうとした。

突然、パソコンの画面が変わる。

六斗は慌てて手を引っ込め、画面を見た。

そこには、血のような赤く染まった狂気の目が映し出されていた。

「ナニヲシヨウトシタ？」

機械から出た声とは思えないような低い声が、部屋に響きわたる。六斗はその声に恐怖を感じた。

だが、ここで引いてはいけないと、六斗はその声の主に言葉を返した。

「もう、終わりにしよう」

「ナニ？」

体から汗が滝のように流れ出る。視線が痛い。怖い。

六斗はその場から逃げ出したい衝動にかられた。

——逃げちゃだめだ！

そう自分自身に言い聞かせ、六斗はガチガチに震えながら言葉を紡ぎ出した。

「やっぱり人の魂を喰らうのは良くない。いくら嫌いなやつでも……そこまでして欲しいなんて言ってるじゃない」

「イマサラナニヲ……」

「君は圭吾の魂まで喰らおうとした。圭吾は親友だ！ 僕の事を陰で悪く言っているなんてあるはずがない」

「ダカラソレハ、オレガガクエンノパソコンニシンニュウシテキイタンダ。オレヲシンジロ」

「嫌だ！ 僕はずっと思ってたんだ。君の聞いてきた話は本当なのかって。圭吾の話を聞いた辺りから疑問に思い始めた。もしかしたら僕は……君に踊らされているかも知れないって事に」

「……」

「そして、今日の君の話で確信した。君は嘘つきだ。親友なら、嘘はつかない。僕は……君に踊らせていただけだったんだ。だから……このプログラムを処分しようとした」

「……」

画面は真っ暗だった。

六斗は自分の気持ちをはっきり言った事で少し気が楽になったが、言ってしまったことに対する後悔と恐怖を持った。

画面はまだ真っ暗のままだ。

「シカタガナイ」

部屋に低い声が響く。

一瞬、恐怖を覚えたが「仕方がない」と言う言葉を聞き取り理解し、安堵の息をもらした。

そして、画面に向かって言葉を発しようとした。

「じゃあ——」

「ナラバシネ！」

——死ね。

なぜか、この言葉だけは一瞬で理解できた。

ただ、理解できただけで逃げる暇もなく、逃げなければと感じた時には、もうすでに目の前に黒くて赤い世界が広がっていた。

「バカメガ。オマエノココロモクライツクシテヤル」

これが最後に聞こえた言葉だった。

画面から出てきた黒い翼の生えた悪魔は、六斗の胸を手で突き刺し、中から何か淡い光を放つものを取り出した。

「コレデオレハ、サイコウノチノウヲテニイレルコトガデキル」

悪魔はそう言うと、腹を空かした獣のようにその光るものを食べた。
だした。

——けいご……。

それは末路は酷いもので、悪魔は心を喰らった後、六斗の体まで喰らった。

「これであいつは戻って来れねえな。ざまあみろ！　ウヒヤヒヤヒヤヒャッ！」

人間の声から、人間とは思えない声が部屋中に響いた。

悪魔は満足したのか、誰にも見られることなく食事をし、姿をくらました……。

episode 1 HUMAN KILLER

死んだ世界には現世と同じように過ごすため、学校があったり帰る家があったり町などがあったりする。

当然、学校にはクラスメートはいるし部活もある。町に行けば色々な店があり大きなショッピングモールもある。

お金は学校に通っていれば奨学金としてもらえる。もちろん、返さなくて良い。

そんな出来た世界で心残りのある少年少女達は毎日を楽しく過ごし、時には青春をしながら心残りなく満足してこの世から去っていく。

いわば、ここは現世に未練のある者たちの心の救済所なのだ。

しかし今、この世界ではおかしな現象が起きている。

『悪魔』の存在である。

死んだものの達の心を救うはずが、死んだものの達の心を悪魔が喰らっているのである。

バグが起きているこの世界。

だが、自らバグを直す手はなく、今まで通り心残りがある者を救おうとするしかなかった。

そして今日もまた、死んだ世界に人がやってきたのである。

午後八時。

グラウンドの隅に少女の姿があった。

その少女は紫色の髪にカチューシャをしていた。

どうやら気を失っているらしく、この世界の新参者のようだ。

少女はしばらくして目を覚ました。

「う……ん。ここは……」

少女は頭が痛むのか、頭を抑えながら辺りを見回す。

90度、180度、270度と見る範囲が大きくなるにつれて、少女の顔色が変わっていった。

そして360度見渡した時には、ここがどこだか少女は理解した。

「嘘……私、また死んだんだ」

十分か二十分くらい少女は混乱していたが、ここで立ち止まっている訳にもいかないので、少女は自分の部屋——女子寮に向かって歩き出した。

女子寮に行くためには階段を上らなければならない。

それが死後硬直のような状態になっているので、きわめて辛い。

「たっく、なんでこんなに階段を上らないといけないのよ。いっその事、バズーカで破壊して低い所に建て直そうかしら」

ブツブツと不満をもらしながら少女は階段を上りきり、女子寮の玄関口にまでたどり着いた。

すると、中から髪の毛の長い女性が出てきた。

制服を着ているところから見て、どうやら同じ学生らしい。

「ようこそ。あなたが仲村ゆりさんね。学園長から連絡は受けているわ。さあ、入って」

ゆりは言われた通り中に入った。

そしてゆりは昔とは少し違うところに気が付いた。

入り口のセキュリティがギルドにあった物のようになっていた。

ゆりは不審に思い、思い切って女性に聞いてみることにした。

「あの……」

その時だった。

突如、玄関口に闇にうごめく黒い複数の物体の姿が目に入った。

——何あれ？

ゆりがそう思うと同時に、寮内から非常ベルのなる音がしだした。目の前にいた女性はそれを聞くと形相を変え、急いでセキュリティのタッチパネルに駆け寄り非常用ボタンを押した。

——ガシャンッ

ものすごい速さで鉄の板が入り口を閉ざした。

外からは、レーザーの音が聞こえてくる。

「何……いったいどうなっているの？」

ゆりは驚きのあまり啞然としてしまった。

そんなゆりを見て、女性はゆりに事の説明をする。

「ごめん、驚かせちゃったね。えっと……どこから説明しようかな」
ゆりは、女性から色々話を聞いた。

あれは悪魔と言う存在で、半年前から現れたということ。

悪魔は夜にしか行動できないと言うこと。人の心を喰らうということ。

もう何十人も被害にあっているということ。

そしてこの被害を防ぐため、女性——藤崎茜は仲間たちと『Devil Busters』を結成して悪魔と戦っていることを聞いた。

「でも仲間は減っていくばかりで……悪魔はぜんぜん減らないの」

藤崎はゆりにそんなことを話した。

話を聞いているうちに、いつの間にか『仲村ゆり』とかかれた部屋の前まで来ていた。

藤崎は「ごめんなさい、暗い話をして」と言うとき最初に会った時のような清楚な女性に変わった。

「ここが、あなたの部屋です」

部屋を開けて、ゆりに部屋の中を見せる。

ある一つを除いて、そこは昔と何一つ変わっていなかった。

そう、窓がないのだ。

ゆりはこれも悪魔対策なのだろうと感じた。

「あら、皆とは少し変わった部屋ね」

中を覗いた藤崎が、ゆりの部屋に入ってきた。

辺りを見渡し、感想を述べる。

「自室にパソコンがあるっていいわね。私の部屋にも置いてもらおうかな」

そう言い、藤崎はクルっとかかたでターンしゆりを見た。

——ドゴッ

「えっ？」

大きな音が部屋に響いた。

ゆりは大きく目を見開き、目の前の惨状を見た。

悪魔が、壁をぶち壊して藤崎を突き刺している。

「に……逃げ……て……」

藤崎は口から血を吐きながらゆりに言った。

しかし、まだ非日常に慣れていないゆりは足がすくんで動けなかった。

悪魔は藤崎を外に引きずり出し、ボキボキという音が聞こえ始めた。

「うっ……」

ゆりはここは非日常の世界だということを改めて実感した。

そしてゆりは武器になるようなものを探し始めた。

机の上にはさみがある。

ゆりは机に支えられながら立ち上がり、はさみを手に取った。

よろよろとしながら、壊れた壁に向けてはさみを構える。

闇に血のように赤い目が現れた。

背筋に悪寒が走る。

「……来るならきなさい」

ゆりは気を強く保った。

突如、目の前が真っ暗になる。

——来た！

ゆりはそう感じ、はさみを目の前の闇に向かって突き刺した。

「グギアアアア！」

攻撃は通った。

しかし、悪魔は鼓膜が破れそうなほどの大きな声を発する。

思わずゆりは耳を塞ぎ目を瞑った。

——しまった。

そう思った時にはすでに時遅し。

悪魔の手は、もうすぐ近くまで来ていた。

——バキィッ

「きゃあっ！」

横からのスイングに、ゆりは吹っ飛ばされ壁に叩きつけられた。嫌な音が部屋に響いた。

——やばっ、あばら二三本はいったわね。

角と羽の生えた悪魔は動けないゆりに赤い目を向けながら近づいて来る。

ゆりは逃げようとするが、足の骨も折れているようなので逃げる事が出来ない。

悪魔はゆりの前に立つと、先ほど藤崎を貫いたように手ものすごい速さで手を突き出した。

——ドゴォッ

ゆりは間一髪で首を曲げ、悪魔からの攻撃をよけた。

しかし、その行動は反対に悪魔の機嫌を損ねたようだ。

悪魔はゆりの頭を鷲掴みにし、壁に向かって思いっきり叩きつけた。

——ドゴォ

壁には、円形のヒビが入った。

もうゆりが動く気配は無い。

悪魔は止めをさそうと、ゆりに向かって槍のように鋭い手を構えた。

「ゆりっぺー！」

一人の男性の声が響いた。

悪魔もその声を聞き、ゆりではなく部屋の外の男性に注意を向けた。

「ひ……日向……君？」

部屋の外にいたのは青髪の青年——日向秀樹だった。

「こいつが悪魔か……素手じゃ敵わねえよな」

「日向君……逃げて」

日向は横目でゆりの生存を確認する。

死んだ世界では普通なら死ぬことはないのだが、今は例外だ。
そのことを日向も理解しているらしい。

「こいよ……鼻ピ付けて牛にしてやるからよ」

「グオオオオオ！」

悪魔は言葉を理解したのか、日向に向かって突進した。

日向はそれを待っていたかのように、ニヤリと笑った。

「バーカ」

悪魔の突進を闘牛士が闘牛をヒラリとかわすように避ける日向。
大きな音とともに悪魔は寮の壁に突き刺さった。

「グガッ！」

悪魔は暴れるが一向に抜けない。

日向はその隙に部屋からゆりを連れ出した。

「ゆりっぺ、大丈夫だったか？」

「バカ、もっと早く助けに来なさいよ」

「へらず口たたけるなら大丈夫だな」

日向はゆりを連れて悪魔から離れた。

その時、日向はある少年とすれ違った。

「後は頼んだぞ」

「任せろって」

その少年は日向と短く言葉を交わすと、悪魔に向かって歩み寄った。

少年は右手に竹で作ったと思われる棒を持っていた。

少年は悪魔の側まで来ると、棒を強く握りしめた。

「毎晩毎晩学園にきやがって……ちったあこっちの迷惑も考えろよな！」

そう言いながら少年は棒を振り回し、遠心力の力で悪魔を思いっきり殴った。

「グオおおお……お……」

悪魔は苦しそうな声を上げると、データ化され姿を消した。

少年はそれを見届けると、日向たちの方に近寄った。

「ケガ……してるよね。部屋の血は……やっぱり藤崎のか」
少年は少し悲しそうな顔を見ると、気持ちを切り替えた。
そして日向たちに話かける。

「今日のところはもう悪魔は現れないだろう。その子は……心は喰
われてないから、安静にしてれば時期にするよ。まあ、でも心配な
ら付いててあげれば？」

「ああ、そうするよ」

ゆりは何かを言っていたが、声があまりにも小さくて聞き取れな
かった。

日向はゆりを抱え、少年に案内されながらその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5489v/>

Angel Beats! -Extra-

2011年8月7日03時17分発行